

法味愛楽

HOUMI AIGYO



てらお ひとし

寺尾 仁 安佐北区安佐町久地・明法寺

越後国府を訪ねて

今年の6月上旬、数名のご門徒と共に本願寺国府別院(新潟県上越市国府)へ参拝いたしました。この別院は、承元の法難(1207年)により流罪となられた親鸞聖人が、妻の恵信尼さまとお過ごしになった草庵の地と伝えられています。

別院本堂の内陣正面は特徴的でした。同一の須弥壇上に、向かって右側にご本尊阿弥陀如来を安置する宮殿、その左側に親鸞聖人の御影像を安置する厨子が並んで設置されています。また、右余間(向かって左側)には恵信尼さまの御影が奉懸されています。さらに、内陣の天井絵の美しさも、心に深く残りました。これらの荘厳を拝しながら、親鸞聖人のご旧跡であることを深く実感すると同時に、長年にわたり大切に護ってこられた先人たちの篤いお心に感動いたしました。別院から車で5分ほどの場所には、親鸞聖人が上陸されたと伝わ

る居多ヶ浜があります。日ごろ、山間に暮らす私にとっては、瀬戸内海ですら心躍る光景ですが、この日本海を前にした時、かつて親鸞聖人もこの海をご覧になったのかと思うと、感慨もひとしおでした。

親鸞聖人は、阿弥陀如来さまの広大なほたらきや、苦しみ悩む衆生のありようを「海」という言葉で表現されることがあります。「本願海」「功德大宝海」「群生海」「生死海」など、さまざま見られます。これは越後でのご体験から生まれたものではないかと、先生方は教えてくださっています。

今回初めてこの地を訪れ、国府が海に近い場所であることを実感いたしました。親鸞聖人はここで、時には海を眺め、波の音を聞き、潮風を受けながら、海のさまざまな表情を感じておられたのかも知れない。そんな想像が広がります。

海に向こう岸は見ることはありません。だからこそ、私たちは

その広さと深さを実感します。親鸞聖人は広大な海にたとえて、阿弥陀如来さまの智慧と慈悲は、どこまでも広く深いほたらきであると教えてくださいました。しかし、同時にこの海は、私の力(思いはからい)では向こう岸(彼岸)に渡ることができない「難度海」でもあります。この「難度海」を渡してくださる大いなる船こそが、阿弥陀如来さまのご本願であると、親鸞聖人は難思の弘誓は難度海を度する大船(「教行信証」総序)とお示しく下さいました。

およそ7年に及ぶ流罪の生活は、当然望まれるべきものではありませんでしたが、国府での日々は、親鸞聖人のお念仏の教えの重要な土台となったことをあらためて学ばせていただきました。私たちは次の目的地、恵信尼さまの廟所へと向かいながら、聖人のご苦勞と、そこから生まれた教えの深さに思いを馳せました。